

## 河川の水生生物遡上環境向上に向けて（石組み魚道の設置）

河川には、アユやモクズガニなどの通し回遊種と呼ばれる河川と海を往来する水生生物が生息し、堰などの河川横断構造物に設置された魚道は、その移動を助ける役割を担っています。ただ、一部には構造上の問題や老朽化によって遡上が困難な魚道が存在しており、対策が求められています。今回、岡山市北区御津地域（中泉地区）の改修事例と遡上調査の結果を紹介します。

中泉地区の堰は、昭和57年に整備された農業用施設で、河川の洗掘により流出した護床ブロックや井堰の止水壁の復旧等の事業が計画されました（写真1）。その過程で事業担当部署と地元漁協から当研究所に堰の魚道改修の相談があり、大学の協力の下、平成29年12月に、水生生物が遡上できるような隙間に留意して石組みの魚道を作成しました（写真2）。

平成30年5月、地元漁協とも連携し、魚道の遡上調査を行いました。魚道の下流側に稚アユを放

流し、上部から動画を記録することで遡上の確認を試みました。ところが、堰の護床ブロック敷設が途中であったため、放流アユは魚道設置側とは対岸の段差の多い場所に集まり、魚道まで到達していませんでした（写真3）。魚道の上部に設置したカメラの動画からも遡上は確認されず、魚道に至る遡上ルート的重要性を改めて感じたところです。先般、ブロック敷設も完了したことから、再度、調査を行う予定です。

平成31年4月には魚道の改良も実施しました。石の間のコンクリート部に窪みを設け、水が溜まる箇所を作出することで遡上途中の休息場所を増やしました（写真4）。作業中、石の陰にはヨシノボリ（ハゼ科の魚）、魚道上部の溜りには小型のエビが確認され、生息場となっているようでした。今後も機能確認と改良を重ね、得られた結果を他の場所の改修に活かしたいと思います。

（水圏環境室：山下）



写真1 当初の堰の様子



写真3 調査時のアユ遡上ルート



写真2 石組み魚道の設置



写真4 追加で作出した窪み